

旅枕松平長七郎

原典脚色者 帝キ
 監督者 八尋不
 撮影者 松田定次
 主要役割 花房章
 松平長七郎 市川玉太郎



寫眞 「旅枕松平長七郎」帝キ松田定次作品
 右より市川玉太郎と春路謙作。

三宅宅兵衛
 田村右平次
 道連れお龍
 水野監物
 鳥助右衛門
 別木庄左衛門
 なまこの安
 かん九
 土手八
 春路謙作
 望月三郎
 大田芳川
 長崎猛夫
 川崎順二
 喜多見
 沖昭
 美城みつる
 小杉凡作

解説——松田定次氏の「相合傘三兩侍」に次ぐ作品である。
 略筋——將軍に恨みを抱いて憤死した駿河大納言忠長の世嗣として稀代の鋭才が恐れられてゐる長七郎の突然の出奔。これは幕府にまつて大事件だつた。東へ西へ早馬が飛んだ。だが當の長七郎は腹臣田村右兵次、三宅宅兵衛の二人を従へた呑氣な旅姿、初めて見る浮世の珍らしさに打興じ乍ら品川を過ぎ、やがて川崎、折柄伯父の紀州大納言の行列に出會ひ、慈愛深く問はれるまゝに亡父忠長の遺言を守り、徳川の祿を食むことの厭やさに生涯無官の浪人暮しをする決心をばじめて打明けた。かくて不遇の貴公子長七郎の道中は愈々舞臺に入つた。蒲原では角力小屋の騒動から遇然反逆兒別木庄左衛門と相會ふ機會を得たが、彼と我と自ら行く途は異つてゐる。長七郎を盟主にといふ別木の希望は打ち棄てられねばならなかつた。
 吉田へ入つて主従は人妻でなく娘でもないらしい仇つほい女を助けたが、これは恐ろしい女道中師道連れお龍といふ女で、長七郎は面白がつて供の一人に加へて了ふ。岡崎の城下に着いた時、街道に溢れる非人群を見た長七郎の面持は俄然險惡になつた。さうして町娘を掠め苛税を取り立て日夜酒色に薄政を忘れた領主水野監物に、突如非人群の亂入とそれのりぐら長七郎の叱咤の前に不承無承頭を垂れぬけに行かなくなつた。この芝居の成功に長七郎が満足する暇もなく、救つた町娘お花と柄にもないお龍の戀心の爲めに又々一樁事は起り、逆恨みの監物の復讐に遂に刃を揮ひ、盡く奸臣を仆し、主従は紀州路へ向つた。